

需給逼迫下の食糧価格上昇

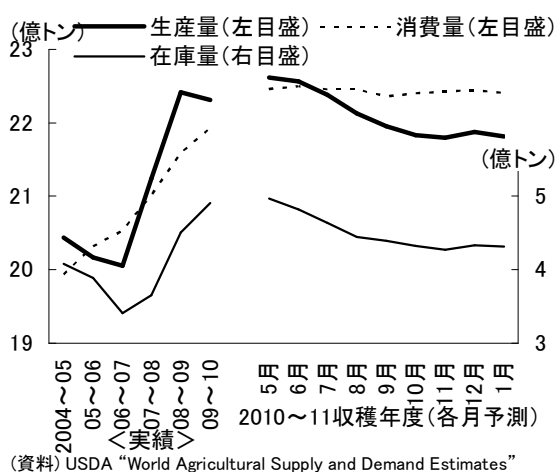
～ 2010～11収穫年度の穀物生産・在庫は一段の減少へ ～

- (1) 近年、一次産品価格はドル相場と連動して推移。しかし、2010年10月以降、連動性が後退。ドル相場が安定して推移するなか、一次産品価格が上昇（図表1）。分野別にみると、資源・エネルギーより、砂糖や小麦など食糧品が中心。
- (2) 主因は次の3点。①ロシアの泥炭火災やオーストラリアの旱魃など天災や天候不順による収量減および、それに伴う生産国の禁輸など輸出規制、②食肉需要の増加に伴う飼肥料穀物需要拡大など新興国の飛躍的成長と所得増加による需要増、③石油価格上昇に伴うエタノール需要増。その結果、事態は単なるインフレ問題にとどまらず、チュニジアにみられる通り、政治リスクに拡がる兆し。ちなみに、エジプトなど北アフリカ諸国をはじめ多くの途上国がチュニジアと同様の素地。
- (3) 今後を展望しても、少なくとも当面、食糧価格の上昇が沈静化する展開は期待薄。生産量が増加に転ずる公算小のため。アメリカ農務省の世界穀物生産予測によると、2008～09収穫年度をピークに09～10年度の生産量が減少（図表2）。さらに10～11年度は消費量が横ばいで推移するものの、生産量が07～08年度まで落ち込む見通し。消費量と生産量との格差は、前回食糧価格が急上昇した07～08年度の前年、06～07年度を凌駕へ。
- (4) そうした情勢変化は各国通貨にも波及。対ドル相場をみると、金利格差や成長力格差による上昇圧力に加え、オーストラリアや南アフリカ、ブラジルなど、食糧生産国通貨が強含む傾向が看取（図表3）。食糧需給の早期緩和が期待薄ななか、食糧生産国通貨が強含む展開が持続する公算大。

（図表1）ドル実効レートとCRB商品指数



（図表2）世界の穀物生産・消費・在庫量



（図表3）各国の対ドルレート

